

2022年度

国語

(問題)

注意事項

- 一 試験開始の指示があるまで、問題冊子および解答用紙には手を触れないこと。
- 二 問題は2~8ページに記載されている。試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁および解答用紙の汚損等に気付いた場合は、手を挙げて監督員に知らせること。
- 三 解答はすべて解答用紙の所定欄に、H.Bの黒鉛筆またはH.Bのシャープペンシルで記入すること。
- 四 受験番号および氏名は、試験が開始されてから、解答用紙の所定欄に正確に丁寧に記入すること（左の記入例参照）。所定欄以外に受験番号・氏名を書いてはならない。
- 五 受験番号の記入にあたっては、左の数字見本にしたがい、読みやすいように、正確に丁寧に記入すること。読みづらい数字は、採点処理に支障をきたすことがあるので、注意すること。

(記入例)

57001番



万	千	百	十	一
5	7	0	0	1

(数字見本)

0	1	2	3	4	5	6	7	8	9
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

- 六 解答はすべて所定の解答欄に記入すること。所定欄以外に何かを記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。
- 七 試験終了の指示が出たら、すぐに解答をやめ、筆記用具を置き、解答用紙を裏返しにすること。
- 八 いかなる場合でも解答用紙は必ず提出すること。
- 九 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

— 次の文章を読んで、後の問い合わせよ。

「政治」はもはや社会的紐帯^aに無関心ではいられない。社会的紐帶の存続に、自らの命運がかかっているからである。しかしながら、「政治」は近代デモクラシーの発展の方向性を逆戻りさせることなしに、社会的紐帶に直接的に関わることもできない。^①このような隘路^bを乗り越えるために、いまや新たなる理論的・実践的見通しが求められている。

このような歴史的文脈において求められているのは「政治」の再定義かもしれない。いや、ここでは通常「政治」とされているものと区別するために、「政治的なもの」という表現を用いた方がいいだろう。この「政治的なもの」とは、言うまでもなくカール・シュミットに起源をもつ概念であるが、今日ではハンナ・アーレントをはじめとする多くの論者によって多様な展開を見せてている。その間に必ずしも理論的な一致があるわけではないが、少なくとも「政治」とあえて区別して「政治的なもの」を論じる必要があるという認識は共有されているはずである。^cではとくにフランスの政治学者ピエール・ロザンヴァロンの議論を検討してみよう。ロザンヴァロンの「政治的なもの」の議論は、現代フランスにおける「政治的なもの」の議論の一つの集約点にも見えるからである。

ロザンヴァロンの理解では、「政治」ではなく「政治的なもの」を語るということは、何を意味するのだろうか。それは「政治社会を構成するすべてのことがら」、すなわち、「権力と法、国家と国民、平等と正義、同一性と差異、市民権と市民に課せられる規則」について語ることである。ただし、それは、「権力の行使をめざす党派間の競争や政府の日々の活動、また制度の日常生活などの直接的な領域を超えたところで」論じられなければならない。すなわち、「政治的なもの」を論じるということは、党派の行動や、政府や制度の通常の働きを観察することとははつきり区別されるのである。

普通「政治」の領域とは見なされない場所でも、人々の集団行動は存在する。「社会」が存在するということは、そこでの人々のさまざまな言説や活動を意味づける全体的な枠組みが存在することである。このような枠組みがなければ、単に人間の集団がいるだけであり、それは「人口（population）」ではあっても眞の共同体ではないからである。人々の集団は明示的なものであれ暗黙のものであれ、そこに参加し、それを共有することができるとなる規則をもつことで初めて「社会」となる。その構成員にとって意味をなす全体をもつことで初めて「社会」となる。したがって、「政治的なもの」とは、人々の言説や活動が束ねられ意味を付与される「場所」であり、そのような規則を作り出す「働き」である。

近代デモクラシーは「分離の組織化」によって発展するものであり、社会は発展するにつれ複雑化し、多くのサブシステムに分化していく。しかしながら、これらのサブシステムは、それだけを観察していたのでは、なかなかその意味を理解できない。

A

、これらのサブシステムは、より広範な解釈の枠組み、すなわち「政治的なもの」の総合的な次元との関連抜きには、その意味を十分に理解することができないからである。

しかしながら、^(注)このような「社会」全体の意味は、けつして自明ではない。とくに民主的な社会、すなわち、「人間の共生する条件がアブリオリに規定されず、伝統によつて定められず、また権威によつて課せられもしれない社会」において、全体の意味はつねに論争に開かれている。このことは、民主的社會に特有な「緊張と不確実性」が存在することを意味する。

逆にいえば、サブシステムの一つであるいわゆる「政治」と区別して、「社会」全体の意味と規則が論争を通じてたえず作り直される「働き」とその「場所」をあえて「政治的なもの」と呼ぶロザンヴァロンの意図も明らかであろう。このような「働き」はけつして一部のエリートや専門家が「科学的」に観察して明らかにすべきものではない。このような「働き」には誰もが参加でき、異議申し立てをすることができる。また、このような「働き」は、狭義の「政治」の場においてのみなされるわけではない。すなわち「政治的なもの」という「場」

は、それがどこにあるのか、当然には想定できないのである。至るところでこのような論争や異議申し立てがなされる可能性があり、「場」 자체が論争のテーマになりうる。つねに「緊張」と「不確実性」に開かれた、およそ静的とはいがたいこの「働き」と「場所」をロザンヴァロンは「政治的なもの」と呼ぶのである。

さて、このような「政治」と区別される「政治的なもの」は、社会的紐帶といかなる関係があるのだろうか。ここまで検討してきたように、近代デモクラシーによる「分離の組織化」が不可逆な動きであるとすれば、いつたん分化した狭義の「政治」が再び社会的紐帶のあり方に直接的に関与することは、望ましくもなければ、可能でもないはずである。

□ B □、従来「国民国家」というフィクション、すなわち社会契約による抽象的な個人によつて構成される「國家」と、その背後にあつてこれを支える、言語・文化・宗教などによる具体的な「つながり」としての「國民」という想定が、その有効性を失いつつある今日、「政治」はもはや社会的紐帶について無関心ではいられない。ここに現在における、ある種の行き詰まりの原因がある。

そうだとすれば、「政治」ではなく「政治的なもの」が社会的紐帶に積極的にかかわるべきではないのか。これはあるいは、言葉遊びと受けとられるかもしれない。しかしながら、「政治的なもの」とはまさに、人々が共生するための条件を論争と対立を通じて作り出し、再定義し続けることである。そうである以上、「政治的なもの」が狭義の「政治」の領域を越えて、人々の「つながり」を創造することに寄与すべき」とは自明ではなかろうか。

実をいえば、今日、まさに危機にあるのはこの「政治的なもの」にほかならない。ハンナ・アーレントやクロード・ルフォールなど、「政治的なもの」の現代的再生に寄与した理論家たちが、いずれも全体主義との対決から出発したことは偶然ではない。「これらの理論家たちにとって、ナチズムやスターリニズムと対決することは、「社会」全体を代表すると自称する「党」によって、権力と社会を完全に一体化させようとする試みを理論的に批判することに等しかつた。このような全体主義の試みは、しばしば「政治の過剰」として語られた。しかしながら、アーレントらにとって、このことはむしろ「政治的なものの衰退」として理解すべきことがらであった。社会全体の意味を、言論を介した人々の相互行為によって確認し、問い合わせする「政治的なもの」の機能が衰退したからこそ、社会全体を吸収する権力という幻想を通じて、社会の「一体性」を保持しようとする全体主義への誘因が生まれたのである。したがつて、⁽³⁾二〇世紀における全体主義の教訓は、「政治」を否定することではない。むしろ「政治的なもの」を再び活性化させることこそが、全体主義の復活を防止する。これこそがアーレントやルフォールらの示唆したものである。

しかしながら、現実にはその後の歴史はむしろ、「政治的なもの」のさらなる衰退の過程であつたといえるだろう。ロザンヴァロン自身、現状を「われわれは明白な解体そして消滅の試練を経験しつつある。つまり、主権の没落を感じとり、また意志が消えうせるのと並行して法と市場の勢力が権力をもつにいたるのを感じしつつある。統治と行政、管理と政治とのあいだの境界線はともにますます曖昧なものとなつてゐる」と指摘している。現代を端的に特徴づけるのは、人々の間に共有される「意味」の不在であり、残されるのはもっぱら個人の選択を強調する「法」権利」と「市場」の言説ばかりである。だからこそ、「政治的なもの」の再生が求められるのであり、人々の言説を介した相互行為を通じて社会の「つながり」を回復する必要性があるのである。

このことは再帰的近代の原則である、あくまで個人が自らの「ライフスタイル」を選択し、個人のイニシアティブで人々の「つながり」を維持・再生していくことと、けつして矛盾しない。ただ、「政治的なもの」の視点に立つことは、このような個人の選択や営みも、社会の共同行動や共有される意味が存在することで初めて可能になり、またより意義あるものになるということを意味するに過ぎない。

逆にいえば、現代における「政治的なもの」の強調は、個人の選択やアイデンティティを否定して、⁽⁴⁾「国民国家」的な共同体へのノタルジーに執着することとはまったく別のことであるはずである。「国民国家」に象徴される「社会―歴史的なもの」の全盛期はすでに過去のものとなつていて。今後求められているのは、「政治的

なもの」の活性化を通じて、「社会—歴史的なもの」の感覚を取り戻すことであろう。言い換えれば、現代における（正負の意味における）「個人化」を前提に「社会—歴史的なもの」を回復するためには、「政治的なもの」の回路が不可欠なのである。個人の思いを超えたところにある超越的な意味の回復ではなく、まさに一人ひとりから出発した共通の意味の創出を可能にするのは、「政治的なもの」の役割にはかならないからである。

（宇野重規『政治哲学的考察』による）

注 アブリオリ……経験に先立つて与えられていること。先駆的。

問一 傍線部 a 「紐帯」、傍線部 b 「營み」の読みをカタカナで記せ。

問二 傍線部① 「隘路」とほぼ同じ意味で用いられている語句を本文中より抜き出して記せ。

問三 傍線部② 「それは「人口（population）」ではあっても眞の共同体ではない」とあるが、こゝには筆者のどのような考え方が表現されているか。その説明として最も適切なものを、次のア～オの中から一つ選び、その記号を記せ。

ア 人間の集団が共通の法的な枠組みを持つためには、構成員をまとめあげる統一的な権力が先行して存在する必要がある、といふこと。

イ 人々が一つの政治的な集団を作っていく土台には、地縁や血縁のような日々の生活に根ざした価値の供給源が存在している、といふこと。

ウ 人々が一つの集団としての意識を持つためには、そこに集まつた人々が共有できるルールを自分たちで作り上げていく必要がある、といふこと。

エ 人々が自ら自分の生きる場所を選び取つていくことで、近代の国家とは異なる新たな集団としての意識を作り上げることができる、といふこと。

オ 人間の集団の動向を統計的に把握するだけでは、政府や制度に対する信頼感を基盤とする共同性を作り上げる」とはできない、といふこと。

問四 空欄 A . B にあてはまる語句として最も適切なものを、次のア～オの中からそれぞれ一つ選び、その記号を記せ。

- A ア さらに イ しかし ウ ただし エ なぜなら オ あるいは
B ア しかも イ いわば ウ または エ もつとも オ とはいえ

問五 傍線部③「二〇世紀における全体主義の教訓は、「政治」を否定することではない」とあるが、筆者の考

える「全体主義の教訓」の説明として最も適切なものを、次のア～オの中から一つ選び、その記号を記せ。

- ア 全体主義の国家が、アーレントやルフォールのような論争的な思想家の意見を排除した結果、社会全体で「政治的なもの」について考える議論の場が失われてしまった、ということ。

イ 人々がコミュニケーションの基盤となる言語や文化の役割を軽視した結果、グローバルな規模で法と市場を支配する一部の国家が「政治」の世界を支配するようになつた、ということ。

ウ 人々の集団行動を管理する「国家」の力が衰えたことで、社会のサブシステムの一つでしかない「党」が、国民を代表する権力として人々を支配することが可能になつた、ということ。

エ 人々が自分たちの生きる「社会」のあり方を問い合わせから遠ざかってしまったことで、権力が上から一休感を押しつけていく全体主義の体制が生みだされてしまった、ということ。

オ 全体主義の国家では、人々が政治的な権力を監視するという発想が育たなかつたことで、一部のエリートが社会全体を支配する強大な力を手にすることになった、ということ。

問六 傍線部④「『国民国家』的な共同体へのノスタルジーに執着する」とあるが、ここではどういうことか。

その説明として最も適切なものを、次のア～オの中から一つ選び、その記号を記せ。

- ア ナショナリズムという虚構を人々をつなぐ絆きずなとして活用すること。
イ 法と市場の言説を支配することで国家の役割を再び強化すること。
ウ 政党が主導して社会全体で共有できる新しい理念を創造すること。
エ 深刻な政治的分断が起こる以前の共同体のイメージを取り戻すこと。
オ デモクラシーの基本原則に立ちかえり「国民国家」を作り直すこと。

問七 問題文の内容と合致するものを次のア～オの中から一つ選び、その記号を記せ。

ア ロザンヴアロンは、人間のあらゆる集団行動の中に見られる「政治」的な振るまいを検証することから、政府の役割を再定義しようと試みた。

イ 現在求められているのは、人々の個人的な意志や選択を大切にしながら、共に「社会」の中で生きる「意味」について考えることである。

ウ 「政治的なもの」に対する考察を深化させることで、近代のデモクラシーとは異なる新しい「社会」の条件を構想することができる。

エ 市場経済の論理が人々の間の格差を拡大させたことで、伝統的な「つながり」に依拠する全体主義の思想が再び力を持ち始めている。

オ 誰もが自由に参加し、異議申し立てができる「社会」の仕組みを作り上げることで、国家と個人の間の「つながり」を取り戻すことができる。

一一 次の文章を読んで、後の問い合わせに答えよ。

リングダ・グラットンとアンドリュー・スコットの『LIFE SHIFT』は、この寿命が一〇〇歳近くまで伸びる社会の人生戦略について影響力のあるビジョンを示した著作である。同書は長寿化によって「老後」とされた人生段階のありようが根本的に変わり、人々は「マルチステージの人生」を過ごすようになるという。

近代化以降、多くの人々が「学習」「仕事」「老後」という三つのステージの間の移行を当たり前のものとして受け入れてきた。しかし、こうして三つのステージで A される人生があまねく浸透したのはそう古いことではない。一八世紀までの世界では、多くの人々に「学習」や「老後」という段階は存在しなかつた。ところが一九世紀末以降、社会全体の産業化と寿命の延び、学校教育の長期化によって「仕事」の前と後に比較的長い「学習」や「老後」の期間が誕生した。^① 二〇世紀を通じてこの「学習→仕事→老後」という順番に人生を歩んでいくモデルが全世界化し、「同世代の人たちが隊列を乱さずに一斉進行することにより、確実性と予測可能性が生まれ」ていった。この確実性や予測可能性こそが産業社会の生産力を支えていたのであり、人々も「機会と選択肢の多さにトマドウ」ことなしに済んでいた。

このような人生サイクルが、人生一〇〇年時代には崩壊する。「マルチステージの人生が普通になれば、私たちは人生で多くの移行を経験するようになる」と、グラットンらは言う。これまでには「学習→仕事」「仕事→老後」という二回だった移行が、三回、四回と増えていくのである。多くの人に、何度も「新しい人生的節目と転機が出現し、どのステージをどの順番で経験するか」という選択肢^a が劇的に拡大するのだ。人々は「仕事を長期間中断したり、転身を重ねたりしながら、生涯を通じてさまざまなキャリアを経験」していく。この人生構造の転換がもたらす最大の変化は、「年齢とステージがあまり一致しなくなる」ことである。これは大きな変化で、この対応が崩れると、これまで年齢とライフステージがある程度は対応することを前提に構築された様々な制度が根底から怪しくなる（『LIFE SHIFT』）。

個人のレベルでも、大きな問題が浮上する。「マルチステージ化する長い人生の恩恵を最大化するためには、上手に移行を重ねること」がポイントとなるにもかかわらず、現状では「ほとんどの人が生涯で何度も移行を遂げるための能力とスキルをもっていない」のである。移行を上手に重ねるには、それぞれの人が「柔軟性をもち、新しい知識を獲得し、新しい思考様式を模索し、新しい視点で世界を見て、力の所在の変化に対応し、ときには古い友人を手放して新しい人的ネットワークを築く」ことができなければならない（同書）。

かつてディヴィッド・リースマンは、消費社会における人々の社会的性格の変容を、自らの「羅針盤」に従つて一方に向かって歩み続ける「内部指向型」から他者たちの評価を絶えず気にしながら「レーダー」を働かせて軌道修正していく「他人指向型」への転換として特徴づけた。日本にそもそも「内部指向型」がどれほどいたのかは微妙だが、この国ではタテ型社会の同調圧力が結果的に人々まるで羅針盤に従つているかのように同方向の人生に仕向けてきた。ところがそのような社会の仕組みが、長寿社会では徐々に B するのである。

長寿社会で人々が獲得するように促されるのは、もはや羅針盤でもレーダーでもなく多面的な複数の役をこなせる変身術である。産業化による経済成長期が終わり、低成長のなかで人生の長さが大幅に延びていくと、これまでのような単線的な人生設計は不可能になっていく。ポスト近代の社会では水平的に多数のキャリアが並行し、流動的な状況の中で人々はその一つのキャリアから別のキャリアへと移動する柔軟性を身につけなければならなくなっていく。

その結果、一方で個人の側では、「人生が長くなり、人々が人生で多くの変化を経験し、多くの選択をおこなうようになれば、選択肢をもつておくことの価値が大きくなる」。私たちは何かを選択するとき、同時に何かを選択しているのだが、それを固定的にするのではなく、他方のオプションを残しておこうとし始める。たとえば、就職も結婚も必ずしも一生を決めるものとはならなくなしていく可能性が高い。こうして若者た

ちは、「選択肢を狭めないように、将来の道筋を固定せずに柔軟な生き方を長期間続け」、その先でも自分の人生が「一定の行動パターンにはまり込むのを避ける」ようになる。他方、社会的には、年齢とライフステージが一致しなくなることにより、「異なる年齢層の人たちが同一のステージを生きるようになつて、世代をこえた交友が多く生まれる」(同書)。^②つまり、マルチステージ化した社会とは、世代の関係構造が根底から変化していく社会なのである。

要點に個人の人生も社会の仕組みも未転作していくことであり、そのためには社会には世代を超えた廻通しのよさが、個人には変化に対応できる変身術が求められていく。そしてまさに「」において、二一世紀の大学も根底から再定義を迫られていくことになる。

なせならば、一方で個人に求められる変身術は、単なる職業再訓練的なものではない。そのような「再訓練」は、すでに確立した既存の社会機能や職能に対応したものでしかなく、二一世紀を通じてその機能や職能が変化していくこうとしているときに、既存の仕組みを前提にした「再訓練」では、新しい社会でイニシアティブをハッキ^bできる人材は育たない。グラットンらも述べていたように、求められるのは、「新しい思考様式を模索し、新しい視点で世界を見て、力の所在の変化に対応」していく力である。新たに与えられる役割を忠実にこなす優等生ではなく、新たな状況やシナリオのなかで、それまで多くの人が思いもしなかつたような役柄を組み立てていくける柔軟な俳優術が期待されていくのである。真に優れた俳優は、

C

外にあまりない。

る。そして、人々がそのような変身術を身に着ける道場のような場になり得るところは、現存の社会では大学以

他方、異なる年齢層の人々が同一のステージで交友していくのは、大学においてだけではない。職場でも、遊びの場でも、同じ変化が徐々に進行する。しかし大学は、個々の学生の知的能力や創造性を伸ばし、同時にそれらを評価する仕組みを発達させてきた組織である。様々な世代の、異なる文化的背景を持つ人々が、いくつかの専門性の高い領域において、また時にはそのような領域の既存の価値を越境して、創造的なパフォーマンスを実現していくことを大学は支援し、その結果を厳しく評価する。だから、大学の学びにとって重要なのは入試ではない。むしろ入試のハードルはできるだけ低く、多様な階層、年齢、国籍、性向の人が入れることが望ましい。しかし、大学は厳しい評価の場であり続ける。個々の科目での学生の努力に対する成績、卒業や修了についての評価は厳しいものでなくてはならない。そして社会は、その大学による評価を信頼し、卒業生たちの知的な変身を受け入れていくのである。

〔吉見俊哉「大学は何処へ 未来への設計」による〕

問九 空欄 A · B

問八 傍線部 a 「トマドウ」、傍線部 b 「ハツキ」のカタカナにあてはまる漢字を楷書で記せ。

B	A
ア	ア
固定化	形骸化
イ	イ
無効化	安定化
ウ	ウ
高度化	分節化
工	工
長期化	合理化
才	才
具体化	一体化

問十 傍線部①「学習→仕事→老後」という順番に人生を歩んでいくモデルとあるが、その説明となる表現として最も適切な語句を本文中より十字以内で抜き出して記せ。

問十一 傍線部②「マルチステージ化した社会」とあるが、このような社会に生きる個人には、どんな生き方が求められるか。筆者の考案の説明として最も適切なものを、次のア～オの中から一つ選び、その記号を記せ。

- ア 社会の変化に対応できるよう、他者の人生にかかる大きな選択を回避するような生き方。
イ 固定観念にとらわれず、異なる価値観との出会いを積極的に受け入れていくような生き方。
ウ 古い友人とのつながりよりも、経済的な利益になる相手との関係を優先させるような生き方。

エ 周囲の他者とかかわりながら、一つの目標に向かってたゆまぬ努力を続けて行くような生き方。
オ 世の中の動きを注意深く観察し、多くの人々が求めるものをつねに先取りしていくような生き方。

問十二 空欄 C にあてはまる語句として最も適切なものを、次のア～オの中から一つ選び、その記号を記せ。

- ア どんな役にも観客の思いもしない仕方で変身する
イ 演出家のイメージを汲み取つて具体的に再現する
ウ つねに同じ役割を担つてストーリーの中に登場する
エ 従来の演劇を超えた新たな芸術ジャンルを創造する
オ ある人物の過去と未来を自在に舞台の上で表現する

問十三 傍線部③「現存の社会では大学以外にはあまりない」とあるが、なぜか。その理由を述べた次の文章の空欄 X にあてはまる語句として最も適切なものをア～オの中から一つ選び、その記号を記せ。

これまで大学は、X。そのような経験を生かすことで、社会の中で新たな役割を担うことができる。

- ア 社会の変化に即した科目を設定し、学びにかかる複数の選択肢を提供してきた
イ 演劇や俳優術を含むカリキュラムを、新しい学科の中に積極的に取り入れてきた
ウ 一般的な職業訓練とは異なる、柔軟な働き方を可能にする仕組みを研究してきた
エ 学生の創造的な発想を重視し、同時にその達成を評価する実践を積み重ねてきた
オ さまざまな人々を受け入れ、学力という共通の指標で選抜する役割を担つてきた

問十四 本文の内容と合致するものを次のア～オの中から一つ選び、その記号を記せ。

- ア 長寿化の進行は出会いの機会を増やしたが、一方で、他者からの評価を気にして、自分の人生にかかる決断をためらってしまう若者たちが増加している。
イ 一八世紀までの世界では、学校教育が普及していかなかったために、多様な階層や年齢、国籍の人々が同じステージで交流することは当然と考えられていた。
ウ 二一世紀の大学は、異なる世代の人々を包摂するために、これまで以上に深く専門的な「学習」を提供する厳しい知的訓練の場へと変化する必要がある。
エ ポスト近代の社会では、人生の長期化に対応して、「羅針盤」や「レーダー」に従う生き方とは異なる新しい生のスキルを修得することが求められている。
オ これからの中では、同じ世代としての一体感に加え、個々の趣味や関心にもとづく短期的で流動的な人間関係のネットワークが重視されるようになる。

〔以下余白〕

<R04162081>

受験番号	万	千	百	十	一
姓氏名					
氏名					

(所定欄以外に番号・氏名を書いてはならない)

問
七

問
六

問
五

問
四

問
三

問
二

問
一

A
a
b
(
み
)

2022年度

国語

(解答用紙)

No. 1 / 2
採点欄

(この線で二つ折りにして書きなさい)

問
十四

問
十三

問
十二

問
十一

問
十

問
九

問
八

A
a
(
う
)
b

2022年度

国語

(解答用紙)

No. 2 / 2
採点欄